

I-1 A.&P. スミツソンの設計思想に見られる“街路”空間の認識について

-身体感覚によって結びつく建築と都市の関係性-

About recognition of "street" space seen in A. & P. Smithson's design philosophy

-Relationship between architecture and city connected by physical senses-

○矢野智也¹, 田所辰之助²

○Tomoya Yano¹, Shinnosuke Tadokoro²

Abstract: I feel the need for life scenes to appear in architecture. I think that people's movements and scenery in such a trivial life scene connect various people. By considering the connection between architecture and the city with the physical sensations in people's lives, we believe that architecture where people's experiences stand out will be realized.

1. 研究背景と目的

建築を学んでいく中で建築は、人々の結びつきや実体的な生活の場面の中に現れてくる必要性を感じる。私はそのような生活の些細な場面のなかで感じられる人の動きや景色などの風景は、都市の中で起こる様々な人々を結びつけていると考える。また、それらは東京のように刻々と変化していく都市の中では風景の変化とともに人々の生活や建築も変化していく必要性を感じる一方で、私たちの生活の中には変わることなく残り続けている体験や風景があるのではないかと感じる。このような、人々の生活の中にある身体感覚の中で建築と都市の結節点を考えることで、人々の体験が浮かび上がってくるような建築が生まれるのではないかと考えている。

2. 研究方法

本研究では人々の生活の場面が生み出す風景の集積した骨格によって、都市と結びつく建築の提案を目的としている。その中で、建築の空間性的手掛かりを人々の生活の中に注目し、建築と都市を交通の空間における人々の動きや流れを基に結びつけることを試みたチームXのA.&P. スミツソンの建築思想に着眼し分析する。

3. 目に見えるものから

1950年代はメディアとして雑誌ににぎにぎしく掲載された数多くの広告によって人々のなかに視覚的なイメージを膨らませながら紙面以上のメッセージを伝達しようとする試みが主流だった。この風潮は、その時代を生きる人々の空間認識のプロセスにも影響があったことをA.&P. スミツソンは述べている。当時、広告は大衆にとって生活のしかたとその基準に関するデータであり、1ページの中に様々な技巧を凝らした「イメージ」を小規模な建築1軒分の建築設計と同じくらの努力が注ぎ込まれていた。これは人々の視覚傾向に大きく貢献したことを言及している。

そのころA.&P. スミツソンは社会学者が提供しうる諸概

念より、もっと「実態をともなったもの」に着眼し、デザインの源を人々の日常の生活の中に求めるようになった。

4. 日常的な生活の風景

A.&P. スミツソンは農民住宅の形態のうちに最大の「親しみ」を見出した。それは農民住宅もある形態と様式を持つが、決して流行に左右されるものではないからだ。建築を生活ぶりの直接的表現として見る彼らからすれば、過去の散文的生活を簡素かつ経済的に残す意識を持っていたことがわかる。

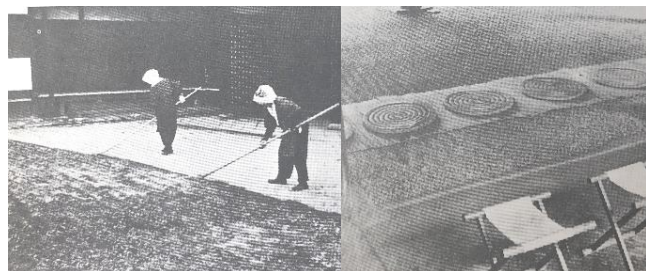


Figure1 日本の農民生活の中で生まれた要素

A.&P. スミツソンは人々の日常的对象物から得たものを基に空間の全体像を作り上げようとしていた。また、農民住宅や集落の中から人間の中に残されるプリミティブな変わらない生活の場面を捉え、それを現代の都市の中で表現しようとしている。この都市に住む人々の生活の中にある場面において変わるものと変わらないものを都市の外縁にある農村の生活の場面と照らし合わせながら考えていくプロセスの中では、建築を通した人々の生活の場面の保存と更新が行われている

A.&P. スミツソンは建築と都市の変化と成長の差に対して、^①「最も豊かな国の、最も大きな都市の、そのまた中心地区で、ただただ建築の財産価値だけが、問題になっている場合でも、建築は最小限20年間もつ。大方は「半永久的」だといえる。すなはち少なくとも数世代は長続きする。都市はだから途轍もないものであり。私たち人生の風景である。」と述べている。

5. 街路による歩者分離

A. & P. スミツソンは都市の構成要素を分解し、住居、街路、街区、都市という構成の中で街路は住居という最小のコミュニティが都市にむけて開いていく場所であり、住居と都市の結節点であることを示している。また、この街路では子供が初めて家庭以外の世界を学ぶ小宇宙のような場所であり、これらが結びつけられていく中で街区が形成されるとしている。

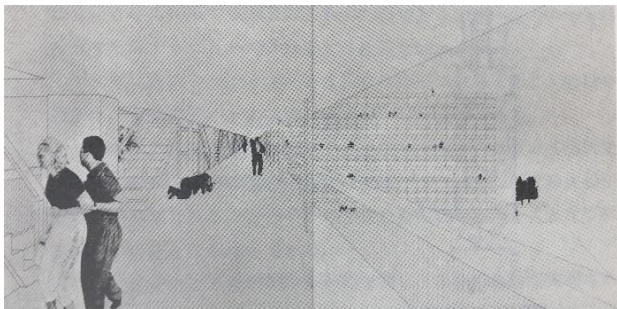


Figure2 ゴールデン・レーン計画

「ゴールデン・レーン計画」のなかでは「街路」という空間を住居の拡張として提案し、それは住戸の広い玄関が面した眺望が良い幅の広い廊下のような空間でそのフロアを使用する家族が日々の付き合いのコミュニティを形成する場所になっている。

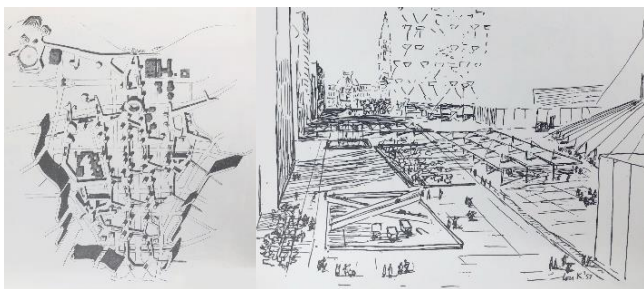


Figure3 ベルリン道路計画案

そのような歩行者が占める移動空間の中で人々を結びつけた「街路」空間は、ベルリン道路計画案（1958）の中で歩行者と自動車の動線を分離するためのペDESTリアンデッキとして、都市の中に埋め込まれた。しかし、この提案の中では、自動車による人々の流れを川の流れとし、歩行による流れを運河の流れとしていてどちらの移動も本質的に人の移動とみなし、その差は速度にあるとして原則としてはお互いの関係は分断されることなく、層の間の移動を介して接続されている。これは、交通（自動車に限らず）のシステムが都市の骨格となるという考えのもとで、人々の流れと運動それ自体のなかに建築を実現することを目指している。

6. 「木」の幹（変わらないもの）と枝葉（変わるもの）

A. & P. スミツソンはベルリン道路計画案の中で既存市街地の道路上部に、インフラストラクチャーとなる空中街路網ともいべき歩行者用歩廊のネットワークが重ね合わせ、第二の大知として、歩者分離を導きアクセスを多層化することで空中街路網に隣接した建築群の活性化をも意図していた。それはA. & P. スミツソンはチームXの活動を通して、変化や成長に対応することを試みていおり、その思想は「木」の幹（変わらないもの）と枝葉（変わるもの）の関係にたとえられるものだった。

この都市の中の変化に対応するために、変わるものは変わらないものを中心として多層化されながらも、つなぎ合わされていくことは都市の中で変化を許容する結節点を形成するという方法は、既存の都市の中に身体的な経験の集積によって形成された層をオーバーラップさせるようなことで、都市の中に散在する新たな場面を発見できる可能性の一端を感じさせる。

7. 結論

これまでA. & P. スミツソンの建築思想を分析して、生活の日常的な場面が生み出す風景を基に建築を内側から全体に向かって形成していくことや、日常生活の風景に目を向けながらも、農民住宅や都市という長い時間の中で生まれる（変化しない）風景と建築という短い時間の中で生まれる（変化する）風景を共存させながら、建築の空間を通して社会の成長や変化に対応していこうとする考え方は東京の日々姿かたちを変えていくような都市の中に建築を考えることの手掛かりになるのではないだろうか。

参考文献と引用

[1]矢代眞己、田所辰之助、濱野良実『マトリクスで読む 20世紀の空間デザイン』2003年 [2]A. & P. スミツソン著、岡野真訳『スミツソンの建築論』彰国社、1979年 [3]A. & P. スミツソン著、大江新訳『スミツソンの都市論』彰国社、1979年 [4]アリソンスミツソン著、寺田秀夫訳『チーム10の思想』彰国社、1970年 [5]ダヴィット・ルウィス編、吉原慎一郎訳『都市構造の論理』彰国社、1974年

(1) A. & P. スミツソン著、岡野真訳『スミツソンの建築論』彰国社、1979年、p117

Figure1 (出展:A. & P. スミツソン著、岡野真訳『スミツソンの建築論』彰国社、1979年、p8) Figure2 (出展:アリソンスミツソン著、寺田秀夫訳『チーム10の思想』彰国社、1970年、p84) Figure3 (出展:アリソンスミツソン著、寺田秀夫訳『チーム10の思想』彰国社、1970年、p61、62)